



煮

酒

松





千重珠のまは子見松よ同く老を如  
鶴と菜の酒より驚り功を葛砂の葉をよ  
あはけし名代尾との種よあはけも命う物  
権壽の酒より驚き危とよふ文代方代  
まはけく正まれの酒より長き命を  
乃く出せぬもよふ其心空すれはむき  
空し祝を次を酒よりあはけし名代  
うしは壯年より風雅の志婦より古地



流と汲ひしやそら水底深き魚先之の葉山  
志多か漸近島北掃洞を霧く絲をくれ  
今や八十此星嘉績道く所も心も健なり  
物実の時を得く伴長中は九日未済小  
鷗の佃土門意はくひらまてか多島北岸  
波も小希洛の初宗と如先部節を雅  
空は波谷積す各あつら海く雲のかさ章  
几ふふ山もさしそよみ揚る雲の月

涼しく北野よ風多し一先と梅来よ咲せ  
て其尾むふは接指き一毎之の秀色  
かふ萩萩風れ多ふく乱まらく人も  
道あふ深は是もとりふ一書くちり一志まら  
方く入送るり山と舟のい山おそくも島如縁  
とたさくえとの心さる毎一叔母集と菅原と  
名はさる謬をかの具風の誰とかも  
知り人りせんや死てはよ今れ霧を仰く



業すれお妙ひの友に控これあつち中は才一  
産家道のかう吟よははく歌好して燈の  
至誠法好支漢さひ白く新よ知事あり  
釋く舞と舞あを先結るれうとの歌は  
望まるといひ行くらもの法家歌の中は居士  
寛政六年やうれ夏  
不特唐已状

於乎聖學亭自修其性一石一壺

款仙 柳坡叟八十贊  
吾も徳ふとてまひるは

老まらうとてき養加減の酒酌ん

今年も喜るふまき 郭云 柳坡

字の松を好む時と得ぬ 實友

彼月意そ尾一應あ給り 仙之

葉繪乃月けきあふと 細胡 来之

嘯山



夢の若枝乃若くも初より  
 有る此御代のまらき乃石清水  
 梯嫌まのせふ行燈の語  
 何ゆへに仁王の草鞋 詠ま  
 情乃為きは代草の文  
 月なき夜ふ待俺乃哀なる  
 埋火まきそく 庵のま風  
 まのうさふ木曾の乱を乃跡とらん  
 仙雅  
 五仙  
 文序  
 執筆  
 倚泉  
 具遊  
 鷺柳  
 志江

扇之海苔の裾乃纏き  
 家名も根付ぬもす乱布袋との  
 俄そ限此為茶好る乱  
 出今の比うき急のまの響り  
 型急の雑子乃響もまめき  
 え政う碑のあやうくもまを 政  
 飲唇乃娘 尻かすく乱  
 今はちやまき一のらぶ弦うるん  
 秋虹  
 池水  
 行隆  
 如全  
 歌松  
 漢水  
 野舟  
 吳羽



多晴きんく 花蝶立由く

文庫

何不き子 隣りあきる 福の神

如何

縁の袖乃 ぬりき 縁よき

辨山

橋の眼と せむ 妹乃 歌うり歌

山曉

流る 水乃 せむい かりる 雲

玄部

面白く 見ゆ 山 の えん 不先

出石

児は 清うら ぬく 霞月

故園

虫の音 糸 初屋の 燈乃 けりや也

文流

きぬ 洗ハ 新米 乃 糠

竿花

京訓 多き 己の 詠りの 雨うら

霞芒

幣より 枯ん 仲を 乃 掛く

霞曉

毎も 増る 庚申 雨力 ぬきりき

樹山

時は 遠しん 定く 捨 鶉

城鳥

舞の 子 不 陽 寺 廣う 歌 花 小 袖

忍丸

玉 心 け 八ん 和 衣 乃 雲 風

風序



八十賀 匠に八喜

八喜や牡丹の花乃ふ鏡 賞友

紫上意集子代涼 竹のま 富嶺

一八乃花日二喜も笑のるぬ 夢里

殊ふけと射前乃かきほも 鴨仁

堀本氏八十賀とせしむる日  
堀火寮室の秘録乃書と終りて

茶の美あふ歡むるし 廿八人 五口

暹りさるの歌ハツ子の美なるが 来之

幸しく交りて久美しむる所の堀本氏の美歌と  
了極ふふ門美あめりてりぬ日一入のてりて

八十氏や申の 堀本乃美あの花の 百秀

すくぬ松 窓もも若る 松園花 仙之

又もえん 八十終る 百合の花の美字 仙雅

縁の美歌集とかきぬの 一本りぬ 為角

花も多き美の老うと驚りの美あお遊年の  
栄と競ふは柳塘の美しきりてりぬ日一入の  
美と告りてりてりぬ日一入の美あお遊年の  
せん行か信は健なるの

花の樹乃美集とせしむる美ああり南 牛行



株橋のあつ竹の子乃勢ひ如

乾寄

八十のさきといふ古蹟は有ぬ

苗よりとくたきまはえぬ美をいふ

如洋

ハ子代を舞十うへてや 数桂

都雀

築園の本意美くともなりうぬ

寄石

月雪とらくくまき竹笠涼

一鳳

身えをき楠の美も乃斜か

五山

美くともなる柳乃眺の飛

集風

如市清く美あり中丸八十流川

吟石

嘗乃老ふふ代流の竹の勢

斗亭

卯浪子浪八重の汐汐の浪りは

呂吟

美あり生る形糸ともく

士口

花桐も五之三子の参りうぬ

丸牛

むすはははくあえき美あり

籠來

楠の根は石くぬも 新樹の那

五株

世乃身事乃根深くは男事

右奇



吾師柳菴... 仲夏の末八十年の暫と  
つらき... 女好士... 芳吟... 詩  
あふ... 座... 何... 詩  
あふ... 詩... 詩... 詩  
八十のま... 老... 且... 詩  
あふ... 詩

旌尾館

千鶴の池... 五月晴 文序

賀正

八十二歳

あふの川... 文礎

さふ... 神... 詩

言歌

従ふ... 桐乃花 巴津

あふ... 夏木... 芦丸

八十... 芭蕉の意 巴丸

空... 乃... 夏實

老... 賀若

東... 詩

百... 花乃... 魚千里



歌仙 三尾

日吉とてぬき多敷ハ本すまきう形

巴汰

すし先の風匂の多毛

巴九

五山の多毛や自起ぬまうせけら

蕪角

雨うきも道のまき一ツ也

汰

音の流るるはるるあき自の宴

九

まけふも白敷 多毛梅の宴

全

雪賢もあましく 詠る婦ある句

角

志小雪もくし 折檻乃杖

全

笈佛も背く道向の定 詠句

汰

佛別 莊はくも石橋

全

若の直へ獲るるを也あき者

角

也乃多毛の也あきの膏

九

柳波字の八十一乃安延と詠ん

納陽全

門田種多の多毛くもあきあけ 詠句

何有



梧桐庵詞宗乃八十とあり一とあり

三河

少くは新も苦はるき復乃中を流す 之仲

其贊

梅好堂

集子代中嘆や八十字る石庵より 如全

身月ふ八句の誓と新と新と

信菴

疑ふも八十鬼河乃長根を流す 可樂

老年ありて懐かきすきを流す

海老と菊ふ八十の齡や 夜このま 山曉

齡贊

洛西

去ふ八を 百を去る者のあはき 野丹

行むうへ 八十を流し乃復柳 玄都

流上は 百を去る人のあはき 故園

八十贊

給ふも 遊き木履乃あはき 漢水

美な旅と 如きあはき 老木あはき 鱗嵐

きあはき 杜母の酒乃あはき 翠二



寄竹八十贊

川倚泉軒

やも茶君乃も誓りよる

きりとりし心も朝ふ林窓き

一着りあふふゆと米の誓

疎捨竹葉中うらむる路

天の八十花を尋ちりし今幸竹

梧と蒼葉と——柳と若花とをまね柳の  
若葉の通ありのまきや梧は風鳥とあ——  
井とあとの功をやるえ柳と風鳥とあきま  
和順の徳とあきり今この若葉を也 田方乃  
雅とあきり門のよき葉半す——あれ 柳と風の  
集りうらむるゆとあま白ういうゆを 四面  
無前枝中心有通理とのか——もかくやなはら  
いあか——もあきりもあきり——まのりき  
蒼とあきり——又とら——の門子とら  
あきり——性も順——のくあきとや——中  
柳のきりあうあきふあきり乃憲清はあ  
口す——乃清あはれあきり柳とあきり——  
まきりあきり風駿子若千うらむ——はきり  
す——あきりあきりあきりあきりあきりあきり  
あきりあきりあきりあきりあきりあきりあきり  
あきりあきりあきりあきりあきりあきりあきり



しやあはれ鳴喚は枯樹枯樹ふらふら  
所のかきまほ拘はつひはを——ひるミ  
ハ向の齡もて舞庭と周をく法好まをまのさ  
考ふはしるぬ實事こののまとのへふ乃白と  
吐く中強と抱ふふこりふもは門不きふ  
と——あはれの枯樹のま拘ははひらりるん  
せえへ解の望ふふあふらふらふら  
ゆきま——まてあふらふらふら

五術舎

其途

ふ枝をふ人楠乃茂りうれ

詩贊

眞美やハミ乃繁りゆ寂乃部

池水

玉草やみけふ又葳うん

踏脚

ハミ松也誠高き若かりし新楓

志江

限りるるもさへ巖の苔乃意

秋虹

だんじりても中らハ十の巻履ま

行隆

老樹の折かすもやうも新中しきまにハ  
さきまはりてりてりてり

眞美やハ十ても枝は提めあ

歌松



賀

云のそふもそふもやまきのほくさか

樹山

八十の賀や秋の一日の賀

風亭

八十の賀とあまのさる子孫さうか  
秋のそふもそふもやまきのほくさか

八の橋を十かへる賀 杜若

竿花

改くふ代来くや今幸年

文流

七年ハ全実あや百人の花

志友

富士権雄マ豊ふ知んあまの教

幸

八十賀

壽乃賀とかなるえん百合花

辨山

美乃あふふ代とこめさる今幸年

餘水

志亦あまのあまめさるきあまの

笑己

八十八のあまの美乃作の賀

常龍

標亦はあまのさる瓜四ツ

常席

柳絮同松壽

亦日給く百日紅乃雪うさ

城鳥



遊覽

花のあけうらふしとてえきまききなりか

秀唐

手あけいのお面ふ清し桐の花

休山

そととてつうきく神さしふさわ

孤山

八十坪の池まきく花の長陽柳

倚井

八十坪の池ふ蒼々夏の蒼ま

何孝

廻文

名月望しつる心のもくけう花

全

八十賀

善哉善哉出さや秋乃かきばそと

獲江

あり善の浪青くく八十洲川

芦秋

八十坪の池うら矢敷乃かきばそと

芦月

遊覽

善哉柳さきけふ老本と忍りゆま

霞芳

長く水と新の蒼乃かきばそと

霞曉

八十洲川從涼しそこの風見ま

龜浜



梅前のまきめふ風さり二月廿  
持初や花の中を花鈴のま  
穂玉の川の名も掛くんお夜ふ  
海原のまきを踏ん泊り波  
峰うら見海見湖や山はさ  
神の下邊の通れ川をさ  
せらうらうら踏んお夜ふ

志江  
秋虹  
行隆  
山曉  
樹山  
孤山  
倚井

其

揚乃考や之尺乃重の心  
馬ふまらぬ雲見付ら夏の音  
蝶啼や細日の流る梢より  
一毛宛風の浪海の子苗む  
龍巻のの花や消らん夏の雲  
暮るる後三時やさきのこ  
英しんちの梅子乃巻るさうね

志江  
秋虹  
行隆  
山曉  
樹山  
孤山  
倚井



秋

清澗や月ふきぬ松がしほ  
海ふらふ山を雲ふかす二日月  
酒風や浮世を陽の暖みの口  
船夕乃月か 残照 雲のさう船  
白萩や月の清ら根を  
山やりと風ふかす一葉か  
雲のさふぬくく 枯楓の

志江  
秋虹  
行隆  
山曉  
樹山  
孤山  
倚井

冬

夜時多や一節細き朱雀の羽  
枯苔乃松とるくあ  
木枯や 始と都ん 麿の礫  
雪病を人かぬけ 茶吟  
云のさふあつと 瀧を多社母  
川 喜か 閑人ぬ 夜也 鐘氷  
雪のくく 無入 窓乃 氷うね

志江  
秋虹  
行隆  
山曉  
樹山  
孤山  
倚井



壽賀

美夢ある平の面影や高氏次子

宣橋

吟めりわハナ端乃名取ま

一笑

咲也牡丹ハキ九子限りま

霞石

孝子け是ハナの賀とらふ名取ま

筆山

賀喜

赤日えのこふまきや芥子持ま

歌龍

子多い乃はまは方片一若雨ま

歌序

壽賀

砂々之巻よりのも空あ若女南酒

尾 婦

倭泉

つやあらん幸乃美水の名取ま

芭紅

合

志本を従きくまき美夢あま

鷹峯

碧人

員一や百日紅乃指すま

蘭丈

合

栄久一栄えこまふくま幸外

未寛



賀喜

松涼一室海峯のさるるを  
 八木まゝ不遜くまらぬ若雨草  
 杉傍の杉竹の子まゝく  
 養老乃流まゝは八字杜若  
 八十は初紙の上のまゝり花  
 何百若老の柏もまゝ鞠も紙  
 ゆきまゝけの松葉まゝ白まゝ  
 如何  
 以耕  
 連水  
 三醉  
 丹龍  
 涼雅  
 山古

美し梅も松も深き月雪も  
 月雪もゆきまゝ玉の結余花も有  
 ちまゝまゝ目もまゝ柳のまゝまゝ  
 あまやせまゝまゝまゝのまゝり苗  
 雪乃乃老まゝ奥のまゝのまゝり  
 雪まゝはまゝを紙もまゝ若葉も  
 折紙も紙もまゝ柳もまゝ  
 孤もまゝは八玉紙のまゝり  
 丸木  
 有隣  
 棠竹  
 李水  
 豈山  
 泥白  
 蘭翅  
 九下



五仙

柳をよむと拾ひてきて第拾の

五仙

くはるおいさむきりくさる

柳坡

世ふるまき仙家の薬作りく

如全

秘の茶器乃折れをさる

有隣

古き名乃ははるる新くき

丹龍

おとす不絶一極の七草

連水

月出夜も夕顔老を龍ぬく夜

山古

石を吹く流生流の向

東竹

とくまの廊の節も中ふ

流雅

やしいまのあゝ燈かある

丸万

降雪も経乃雪の帯飢一

山皇

ま〜けの境目纏りてん

筆一

寺善清お浮の工乃果るまき

李子水

紙病之妙くは月のまき

蘭翔

梓ら根との家ハ数ええく

泥白



白と鹽乃無ふ海にそ

箱遠

君よりぞ歎定をぬき日終る

永木

蟬乃列来——浮橋のと

如何

下略

きふく巴ゆ子のき巻と詠の橋木

老字色の八十の望せしよ作事地人の

すゝふまぬらふ素白と星ん

巴列堅田

賢く聞る清水結らん 柳の陰

巴水

春 仁和寺夕暮

長く閑く春の暮や暮の陰

仙雅

魔りなく或はの暮や猫乃意

文房

奈と出るる鳥ゆき夜も蛙啼

鷺御

上は雲や押せば出る蟬這る蟬

未覚

去年の程の工又お秋の一きか

款松

籠れ中やおまらば二日碎るらん

漢水

袖すぬき一足鳥籠 橋木うね

琴二



長閑さや北の色の傳り閑く

竹花

新白き小田の枝葉も春の月

文流

物考もや矢各落馬に君乃前

種江

夢や花踏こげん百の春

勇龍

山ささるふもは見えく夜多

花鳥

物新しあふきふ春の月

錦花

崎城の空いつせさくら乃花鳥

葉紅

何となく静の禮り離の酒

翠山

夏

物のもや日よあまの細代寄

仙雅

弱く吹すもむる春乃美もあは

文序

百珠しも独あうもきあ静か

鸞柳

細清やみのとをふあまのそ

歌松

春の石く枝も春あはり 涼意

文流

日影りもあまの静か 夏の系

鱗峯

春 麓乃 浅くもあまの思ふか

竹花



月更く川筋白く啼る鶉 獲江

只の麻の葉はうねるん水鏡か 葉紅

まほ振も青もくさる吉野川 花鳥

歌つらも何さう人乃父 涼 錦花

豊年乃まじくも振ふ田舎か 翠山

命登る松枝のまや雪の象 丹別山本 朶月

秋

行路とまふもあはれやみの忍 仙雅

秋風とあまふ二日乃暮や沈 文序

白葉の物影も影不けあつた 踏御

秋夕のまのや吹あつた 漢水

葉の戸へ先をけくも松の風 歌松

灯の思ええをきくもあやらのま 文流

九月上旬の比叡清見の日迄  
宿ふかきとあまきで

宿をくさぬも月のまを燈 竿花

菴の背ふくまぬのる乃中より船 蘆江



草花や隣りては谷心

葉紅

入相也昔より淋しき雨の月

錦花

淋しきの仙の雲ある中乃云

花鳥

半多掃や切きしりし猿の音

翠山

冬跡安否はたし

如男僧や雲のけりいふ之別を

仙雅

庭まき equal 捨く有るり冬日

文帛

かほくも方の可憂きよ冬暮り

鶯御

今なき人なき日く志らぬう

歌玄

孫守り多切平一はるく日南の

文流

名有本小物平に冬と如あう

竹花

弱き日の行而きくやあす舟

蘊江

山く乃秋乃さ冬白く落るる

花鳥

冬柳乃世ふさきうく白ひる

錦花

冬葉香のこ寒るる冬木の揺

葉紅

立冬の旅と去るる冬葉の音

翠山



吟贊

富雪庵連

後うらみ水は十八小角をうら  
 出石  
 八十島やまんく晴る 和房了  
 貴刀  
 八十形はよき道やまうぬきけ  
 仙丈  
 美竹やま〜三丈の空〜紙紙  
 志勇  
 岩もや根や〜とけ〜とま〜不咲  
 歌柳  
 ます〜とま〜ひま〜百合と連立ぬ  
 林鳥  
 幸と積むま昔ま水や 新涼〜  
 富桂

皆の身や白髪と祝ふたろひ質斗  
 梅月

五調の歌集を終る

八と十まの〜ま〜と美〜ま〜うら  
 吟水  
 皆と祝ふのふも涼〜 梧洞為  
 富曲  
 芳物や群捨詠まん 山とりま  
 和醉  
 第一とま〜ま〜とま〜と鉄線花  
 露忠  
 西桐乃美ま〜と終る  
 立之  
 群うまの詠まん 八十乃 執吉花



月よりや名の本葉えく夏あま

雅雪

八十の草をよめく夏や百合の花

藤柳

夏も物き 袷や 八十 露

春柳

和門葉のきせうに打ゆくあり

柳葉の八十の草をよめく夏あま

一とてはあしむ移り長安を移りあり

神水や 年代のはり

保合酒

仙雅

梧桐菴老翁の今半半の賀集を編みあり  
之は他巻の御説のふき巻の叙とあ初し  
けきありあめは長安の草をよめく夏あま  
師恩を謝せんて欲す教而已

表六句

様分齊

末木

昔年の白のかりぐぬ花抽り那

松は常盤ふひは袷や

幾めらわ山乃給すのこ 露

あむ柳子の誇すくこあ葉

あの日替は袴をよめく夏あま

あま ちのきさ年と提く酒あり



奇賢

垢柳坡雉家八十初度  
一廬久著卧詠中嬰鏢  
全迎八十玄好雅古生  
誰得比縱橫任杖地仙  
身

路無如若科

梧桐産ふちを同くく風雅な導き  
あまら翁乃之喜と終るは終るをまの  
うまの如くめを祝し侍る

さびやふんゆぬ八十一年乃其木柳	講石
掃やかかしくま白くひう一人	春終
八十一年乃其木柳	花鳥
誰も翁一先とのを桐乃花	葉紅
隣りなき八十峰山乃志きりく南	錦花
八旬のきけ竹の子乃路いし	組琴



あやうきや從百希乃きぬ酒 翠山

右

四まおぬ白

芦笛改

しづく濁り志踏うき小田の俣のき 蘭翹

鶺鴒舌さきりアカサタハミマラワ 全

家更毒青きかぬきり母の雪 全

道占の人ま告ん霜乃ま 全

空まおぬ白

歌中山僧

遠くまや振一あふまきり 田次

甲宮初夏例がきなふ乃路まを

紀伊殿のきりまをさげまきん 全

放生會群とんと尾とるれきり

一宿しき

待く宵ふこのとけまきり 霧の坊 全

寒くまは余はぬまの白く雪見か 全



春 初老

公もけかりしむ志の 初日う水

如余の志と葉葉浮むる言洛さゆり

雲氷の味はこころきんぐのま

本卦

根ふかへき又咲き初々 春乃春

古稀

圓の杖はくちふとと唯のま

露の地はるるわれ終は八十乃春

元朝至廟又訪く

梅う香乃四方ふ句の神のま

如羅の香はまらりふか梅のま

梅う香をまらりふか梅のま

かきまきしりや 梅 やまき

柔和かりの春の柳乃 節まき

梅より 葉屋の給ふは 柳うね

料ふや池一まん、血の口うね

又藤おいさく二才乃を子のま

桃

夫くそり梅と梅乃中娘

柳坡



白雲の秋め

神々如く今草の芽乃集夜月

初花

舞う花場鳥籠 花ふらり  
行しそふ 友ある花のきりうね

仁和寺の夕暮

静まりて雲はきり 花の暮而

日蓮大士五百を名引とほせまじり  
唯々座宮流布乃お文士のあそりか  
空風の吹んちる半そるあそり

咲揃ふの 吹くや 後乃五百軍

夏

老の力乃 云將きよく山 給

晴る雨人と二人きり山生と不登海寺  
乃まき餅も又へさるるか志くくして二音  
三音喜信多れば是はあ松の芽いさるん

三人の中ふ 師老あ の 郭へ

けくきん 障の 新 開あり

晴る 紙る 行く 軍報 うね

一音音打しり白き紙とりの大難不と冬方葉肉老  
助ら色かしく 障を障きふあり再りかき  
ふあはらりとも 湖水の眺を又観なり

後お紙す 白鳥紙や けくきん



京交乃花有り湖の蘆刈毎  
草外一き向也新樹乃るの枝  
半盤本意世あるまきして高きか

川口落合今日和待しき

鳥や啼くふ船の出入きやうく

長別茶向の宮は平家の一門入水是也  
つうく言とふ古も旧跡ありきや  
見出さうし中も落合するまき名物あり

表さや鏡乃中の一や子解表  
五月もや山立さうりき  
春小枝しりきやきしき  
初萌子

鴨牛しや高野山乃行る

文治ふ語を

園く乃蝶きくやうつく

秋

きんをく暇あはしくとく  
きのあをきしりもの  
くあはれ何流きり  
編まや初ねの夜乃  
踊りまや文をきあや  
木のまあはれとけむ



残り物しは思ひぬ思ふさう物  
初何で船と並りー 浪の流  
名月也さう書の中も 神と云ふ  
美と云ふ乃雪をくわぬ良夜也  
糠 星のぬらさるるまらあの日  
名月也 花はさる日の定まらす  
土豊良猫が浦神をさす持りたはけの人も  
あはしる名月と唱へ彼歌集のまへ乃花を  
一多配下の月と云ふのあひかひい出らるる  
是も飛丸月の流すうに京とぬ  
餘さるる古言と云ふや 鬼がしあ

人々聞くらば中りのまじり麻の志る  
麻 啼くや 霜光陰はめんとも  
神 のまや 周りまをまぬと菊仙の  
ま陽長依彌信大明神 乃あふ礼とく  
神をま夥し一重人の見物後が花やふ  
掛りしあまう授けられた見物多し  
倭 唐土名れにさるん今日のま  
淋 きの色とあけられた紅まう物  
繩 法乃あまけりしき 草の心

冬  
朝日乃竹さるり 初しと云



夕虹や時雨のちり乃 鈴を中

初冬の日葉葉を穿ちて結て連珠を  
一帯一帯に朽る亭の地行の

御有るは誰うたうを 神の宿  
風乃すくくふくくくや 枯柳  
物喜乃平ぬすくき 霜夜うぬ  
初雪や 風ふ起く乃 一思 家来  
扱扱多待物きくくくくの雪  
初雪や 面白ぬ乃 都 多土  
何れしり 動く物きく 初雪雪

成胡守より名ありあ天の橋をさる

おゆん風系ふまきあまのをく

携えや 雪の目くきま 六里  
人の老くあ物くくく 乃言  
稚童又あまき 待うの 母より  
いふせん 老行の 乃言ぬや  
まとのの 行拂をきめくくぬ  
回時乃 扱ぬもくくぬぬぬ  
蓮乃 実の 花あり 幸乃 實  
何れ玉ふる鳥ぬ玉乃 一夜うぬ



奥歌

神月もよ佛もよ神もよ

そよそよそよそよそよ

三寸秘利を取前

三寸秘利を取前

三寸秘利を取前

徳あはれ徳利を神乃棚

かきかきかきかきかき



